



英雄

は

寵愛シリーズ4
小説 カルビ

闇のなか

R18

焼肉文庫

もくじ

- 1 牝牛聖母の勇者様……………3
pixiv 修正 寵愛 37(2019年10月20)
- 2 淫惨なエピソード……………32
Pixiv 修正 寵愛 38 (2019年11月2)
- 3 魔法少年を有効活用する幾つかの事例…53
Pixiv 修正 魔法少年を有効活用する幾つかの事例(2020年3月29日)
- 4 ヒーロー牝牛ペット計画……………78
Pixiv 修正 ヒーロー牝牛ペット計画 (2020年11月29日)
- 5 かわいい弟子……………99

牝牛聖母の勇者様

「勇者様が帰って来たぞ！」

誰かの一言に街人たちがわあと歓声をあげて、外界と街を繋ぐ門へ走っていく。

門の近くまで行くと、馬を引いて歩いてくる青年がいた。彼は勇者にしか装着できない青と白の聖なる鎧と、勇者のみにしか扱えない聖剣を腰に携えており、たしかに勇者本人である。

「勇者様のご帰還だ！」「魔王はいなくなっただんだ！」「ばんざーい！」「これでもう魔物に怯えなくていいんだ！」「万歳！」「勇者さま万歳！」

あちこちから祝福と歓声が飛び交い人混みが激しくなるなか、勇者は微笑んだまま人の波に紛れて何処かへ消えてしまった。

.....

「ふう、ふうううううー！ んっぐううううー！」

お祭り騒ぎの街中から外れた場所にある、公共のトイレの中で勇者は脂汗を流していた。人が通らないか不安で聞き耳をたてるためと、鍵は掛けているが不安で、扉を押さえつけながら蟹股でしゃがみこんでいる。

「ほおお、んっほおっへえええ〜！ ほっひいいいい〜！」

街中で微笑んでいた余裕をかなぐり捨て、勇者は大量の汗を流しながら体中を火照らせ、浅く短い呼吸を繰り返しながら切羽詰まった手つきで鎧を外す。

鎧を脱ぎ捨てると勇者の肉体に変化がおこった。

ムクムクつと乳房が肥大化し、下腹部は膨張し臨月の妊婦同様のポテ腹となつてしまつたのだ。

「ひっひっ、ひっふうううっへえ〜！ ンアあああ♥」

艶めかしい声とともに、自ら尻タブを搔き分け肛門を外気へ晒す。

本来なら慎ましい小さな穴のはずが立派な縦割れアナルと化して、肛門皺は肉ビラのよう伸びきつて淡い桃色に色づきながらぷりぷりつと肥大化している。

「んほっほお♥ でりゅ、でつるつろおおお♥」

ぷり、ぷりぷりぷりぷっばあ！ ブビブビブビ！ ブビブビブビ！ ぶっば！ ぶっぢゅつるびゆるううううるう！

屁放とともに飛び散る直腸汁。二重三重へ肛門皺が捲れ返り、甘酸っぱい匂いとともにむにゅつと不気味な色をした巨大な鶏卵が顔を覗かせる。

「た、たまっごおお、おっおっおおおっ♥ てる、ダメえ♥ だっすなあ、てるなああつおっおっほっふい〜♥ んっほ、っほっへえ、で、でき、ら、いがまんできらいんっほおおお、お、お♥♥♥」

ぶっりぶっば、ぶっぢゅ！ ぶっりゅ。……つぶ！ ぶっぶりゅ……ぶり、ぶり……ぶ

つちゆ。ぶつべ、ズリユリユ……ヌツポん!

巨大な卵は中々ヒリだせず、しかしある程度肛門から排泄されるとあとは勢いよく抜けだしてきた。勇者の肛門が十センチ大に拡張し直腸の奥まで外気へ晒す。

「お、おお、お♥ いぐ、いぐいぐいつぐううううううう♥♥♥♥♥♥さんらんいつぐう♥ ケツ穴さんらんぎぼぢいいいい♥♥♥♥♥♥」

ビクッビクビクッ! ガクガクッ!

白目を剥きながら産卵アクメを発散しようとして全身を震わせる。豊満すぎる胸とまだ大きいボテ腹が揺れた。

グルグル、ゴキユルルルル……。

下腹部が唸り、ボテ腹の表面がボコボコと波打つ。

「ン、アぐるまだぎでるう。う♥ ツオツオオ、オ!!」

勇者は魔王を倒していなかった。

魔王に戦いを挑み返り討ちにあい、凌辱され敗北の印に種付けされ孕んだ挙句、わざと解放されて街へ戻ってきたのだ。

勇者に授けられた鎧には聖なる力が宿っており、呪いを打ち消す加護が施されていた。鎧による加護を魔王は知っており「ならばどれだけ吐き出して問題あるまい」とわざと呪力をたっぷり含んだ精液を直接胎内に注いできた。

鎧の加護は魔王の呪力を完全無効にはできず、妊娠を大幅に遅らせることと、鎧の装着時に見た目を誤魔化す程度だった。

さらに魔王はあらゆる魔物の始祖である。

ボテ腹の勇者へ、どんな魔物が生まれてくるのかは自分自身でさえわからないと笑いながら言われ城を出された。

「ま、魔王さまの、子種つよひゆぎるう……お♥」

ヌッポン！ ヌッポン！ ヌッポン！

今度は通常サイズの鶏卵が尻穴を飛び出してくる。ただし色は先程の巨大鶏卵と同じ不気味な色合いで、殻に血脈が張り巡らされ常に鼓動していた。

ヌッポン！ ヌッポッポン！ ヌッポポポポッポン！

ヌッポン！ ヌッポッポン！ ヌッポポポポポッポン！

ヌッポン！ ヌッポッポン！ ヌッポポポポポッポン！

「おおお♥ でりゆ、いく、さんらんアグメちでる♥♥♥」

巨大卵の産卵でガバガバになった肛門は、軽々と魔物の小さな卵を産み落としていき、狭いトイレのなかで魔物の卵が十も二十も溢れかえった。しかし勇者のボテ腹はいつこうに収まらない。

「どまつでえ、むりいいい♥ ケツマ×コイギすぎでるりゆうううううううう

♥♥♥ お?! ツツツ お! く、ぐつるうう! ま、まつだおつきいのがぐるうぎへ

つるううう、んっほおっおっおっいいいいいいいい♥♥♥」

ゴリ、ごりゆ……ごちゆ、ごちちゆう。ぶりゆ、ずりゆ、ごちちゆう! ぶりゆぶり

ゆ……ずちゆりゆううう……。

小さく窄まりだしていたアナルがメリメリつと直腸が拡張されていく。ゆつくりと、じよじよに巨大な魔物の卵が排泄器官を下っていく。

「お♥♥♥ つぼおおお？ イボがあゴリゴリつでケツマンにグるうう うう うう
♥♥♥♥♥ ごりごりされてメスチ×ポ、おつきしぢやううう♥♥♥♥♥」

今度の巨大卵には殻に疣がついていた。ズリズリつと卵が動くたびに排泄快樂だけでなく、肉壁を刺激させる痛悦さえも与えられてしまう。

「んううう、つふううううう♥♥♥ ほっひいひいひいひいひいひい♥♥♥♥♥」

ずっぽおおおおおつ！ つずつふううううぶおお〜ぬっぶ、ぶっぢゅん！

最後までゆつくりと、疣が肛門皺を巻き込みながら二個目の巨大鶏卵は生まれ落ちた。肛門孔がさらに十五センチにまで拡がりを見せる。

「んっぽおおおおおっひいひいひいひい♥♥♥♥♥ んっぽお おお おお おお だめ、
ま、まっで、ご、ごんらんおむり、こわれりゅ、ごわれぢゅ うう うう いっくうう
うううううううううううううう♥♥♥♥♥」

疣の媚刺激で張りつめていたものが、巨大な異物を出し切った解放感をトリガーに暴発した。

ビュー！ ビュルルルル！ どつぶつぶゆるるるつぶるるうううう！ ぶつぶゆ！
ぶつぶゆるるるうつるう！ ビューブビュルルルル〜！ ブビュルルルル〜！

花芯が高々と甘い香りのする液体をたっぷりと噴射した。それは精液ではなくミルクだ。勇者自身の種は魔王によって搾りとられ、かわりに栄養満点のミルクを射精するよう肉体

改造を受けている。

「んっごおおお♥ みるくチ×ポとまりやないいいいいっほおおお お♥ お♥ お♥ びゆるびゆるでてくるううう ♪♥ どろどろネバネバの種なしチ×ポじるうううううう ♪♥♥♥」

どびゆる、どびゆる。ぼびゆるるぶつびゅううううううう。びゅうぶつぶるううううううつぼびゆるうううううう！ びゅぼおおびゆるうううぶぼおおおおお！

普通のミルクよりも粘っこい半固形の液状が尿道から尿道口までを抉るよう、成人男性の何十倍もの量と勢いを小さな尿道口から噴射。

「じぬううう、ぢんじやうううう。みるくち×ぼびゆるびゆるしゆぎでぢんぢやうよおおお おお！」

快楽をどうにかやり過ぎそうと、もんどりううつ体を扉に強く押しつける。豊満すぎる乳房が柔和に潰れ、硬く尖っていた乳首が荒い木板の扉に痛いほど擦れた。マツチを擦ったように乳首にも火がついたと思うほどの、強烈すぎる快刺激が胸を劈く。

「あああ あ〜♥♥♥」

ブシュー！ ブッシュウルルルッ！

ぶつびゅしゅうううう！ プッシュアアアアアアアアアア！

肥大化し過ぎた胸に合わせて大きく長く成長した乳首の先から、射精と同じ勢いで母乳が飛び散り甘ったるい匂いがさらにトイレの中へ籠った。

そんな濃厚な乳の香りに触発されたのか、ポテ腹の表面がもぞもぞと動きだしふたたび

「~~~~~ツつごっほおおおおおおおお お♥♥♥ つぐううううううううう
うう♥♥♥」

喉を反りあげ、ただただ叫ぶ。無意識に腰をふりたくるので、花芯と重たい双乳が揺さぶられ壁へ天井へとミルクが飛び散る。

「あ、あ?! んっひほっへええええええ♥ ぶりぶりいつぐううう♥ しよくしゅぶりぶり♥ ぶりぶりあくめえええんっほおおおお お♥♥♥ ケツマ×コいぐううう う♥♥♥ いっでりゅ触手うんでえるんっほお お♥♥♥」

ブリ! ぶりびゅりびゅぶりゅ! ブリ! ぶりびゅりびゅぶりゅ! むりゅむりゅぶりゅ、ぶりゅむぶりゅぶりゅ…ぶりゅむぶりゅぶりゅううううぶりゅむぶりゅぶりゅうううう…!!

毛虫のような幼体触手を二十匹ほど産んだ次には、不揃いな玉をアナルビーズのように繋げた数珠触手がヒリでてきた。数珠触手はひたすら長い。一メートル、二メートルと延々とでてくる。小指サイズの玉が窄んだ肛門孔から連続排泄してきたと思えば、派手に肛門皺が捲れ返るほどの玉が顔を覗かせる。

「んほおおお…おおおおおっひ…おっひりいひいんっぐううううう! ああああ
あ〜♥」

大便をずつと排泄している感覚がつづく。ドス黒い快楽がアナルに渦巻き、ぐびゅぐびゅと直腸汁が勝手に分泌され触手と尻穴の隙間から野太い直腸汁が滴る。花芯と乳首からも細々としたミルクが垂れつづけ、未だに射乳快楽が止まる気配がない。

甘い匂いが籠るトイレの中には、たくさんの卵と触手、一本の長い触手で満たされていた。

そして息つく暇もなく、次の魔物が勇者の肛門から生まれてくる。

ブッポぶばばっばば！ ぶちゅぶつちゅブリリリリリリリ！

ブッビイイイイイイイイ！ ぶび！ ぶびぶびっびっび！

ブツリユウウウウウ！ ぶびぶびぶつびっ！ ぶつぽびいいいいいい！

スライムだった。粘液魔物が腸壁の皺の一つ一つを模りながら透明な大便として出産糞便されてきた。一緒に屁放すら漏らすし始末。

甘い匂いと硫黄臭さが充満し、狭く魔物だらけの個室は変な臭いに包まれる。

「おおおお おお おお おお♡ クソぢでる、なんで！ なんで、クソしでケツマ×コかんぢじやつでるよおおお おお おお?! ンおおおお おお♡♡♡」

魔を退治するはずの勇者が、魔物を増やす。それも尻から糞便のように。

屈辱の涙がとまらない。しかし顔は、にへつらと笑って排泄アクメに酔いしれている。

「はあはあああ……♡ つふううううう♡」

数珠触手よりもスライム出産は早く終わり、次の魔物が生まれてくる気配はない。だがまだポテ腹のまま。汗ばみ火照った肌を冷たい風が撫でる。

トイレの扉のわずかな隙間から外を伺うと、真っ暗になっていた。勇者は昼頃からひたすら魔物を出産し絶頂を繰り返していたのだ。常人なら衰弱死しているだろう行為だが、勇者に選ばれるほどの強靱な精神と肉体を持ち合わせている青年は、改造された肉体でひ

たすら快楽を貪り喰い死ぬ気配を微塵も感じさせない。

「はあ……はあ……ン♥♥♥んっほオオオオオオオオオオオッ！」

雄叫び、ギンッと背筋を伸ばす。瞳が白目を剥き舌がだらりと垂れ下がった。

モゾモゾとボテ腹が波打つ、産気づき夜風で冷えた肉体がふたたび淫熱に炙られる。

「ひつき！　ぐつつひいいいい！　つご、つごおおおおお　お！　ンっほつきいいいいい！」

ぐじゅ！　どつぶ！　もぞぢゅ！

じゅぼじゅぼぼぼ、じゅぼぼぼ！　ぐぢゅ！　ぐつぶ！

卵とは違う硬さで、触手よりも太く、スライムなんかよりも圧倒的な質量を持った存在が胎の中で動いていた。その存在が動くたびに、開きつ放しの肛門から直腸汁とスライムが混じった汁が噴き出す。

「っふううう、っふううううううううう！　っお、っほっおっお！　っほおおおっおおっお！」

胎の魔物が動くたびに目を見開き、絶頂声をあげる。ブルン！　ブルン！　と爆乳が今まで以上に跳ね踊り汗と母乳を飛ばす。

「お、おっほ、ほっへ、あっひ、っひいいいいい！　く、くっすりゅ、うま、れっすりゅ、うまれひゃうっほっひいいいいいいい！」

今まで産んだなかで一番の質量と大きさだが、直腸を一気に滑り落ちてくる。魔物が生まれる瞬間、勇者は顎と背筋が折れそうなほど仰け反らせ、巨乳を扉に強く押しつけた。

ブッポ！ ぶりゆつ、ずりゆつ……ぶつりゆぶりゆつりゆつ……ずぶぶりゆううううう！
ブッポ！ ブッバア！ ブッポオ！

「おつっひいいいいいいいいいいいっつっつ♥♥♥ くっほおおおおつおつおつひいいいい♥♥♥ ……はあ……♥ ……はあ♥ お、んっほおおおま、まだぐつるううううう♥♥♥」

丸まった体勢の幼い魔獣がスライムに包まれながら尻穴からポトリと落ちてきた。数秒間をおいてさらにポトリ、ポトリと、幼い魔獣がスライムに包まれながら何匹も生まれてくる。

「ふっへっほっひいいいい♥ ぐ、ぐる、まだつくるうううう ぐ♥ まもの、でてくる、うまれつるううう。うっほおおお お♥♥♥」

勇者の肛門からゴブリンやオーク、稀に悪魔が混じって生まれては、次々卵と触手とスライム塗れの床へ落下していく。幼体の魔物たちは、丸めた体をスライムに包まれているので落下死の可能性は低い。

「お——おっおおおおおおおお お、お、んぐうううううう ぐ♥ ツグろおおお お、お、お♥♥♥♥」

肉壁越しに小さな顔の凹凸が伝わってくるだけで、花芯がどろどろ母乳ザーメンを大量に吐き出した。

扉の木板と擦れるだけの乳首が痛いほど尖り母乳を噴射するほど切なさが募る。魔物を産む快楽と比例して、へこんでいく胎が寂しい物足りない。

淫惨なエピソード

「ハアハア……ああう……おもい……ふううう……」

たぶん。たぶん。

ただ歩くだけで、肉体に張りつい重たい乳果が大げさなほど跳ねて揺れる。頭よりも大きな釣鐘型の乳房は、淫熱を孕み布と軽く擦れるだけで乳首が眩い快楽を覚えた。甘い息を漏らしてしまう。

「んううう……尻が……キツイ……ふうううう……ああつ」

乳よりも肥大な大尻は常に燻る疼きを抱えており、激しい愛撫を欲してしまう。

そんな淫らな心情を察したかのよう、与えられた衣服は一回り小さなサイズでショーツからタイツまですべてが喰いこみ微弱な快楽を与えてくる。さらに、皮下脂肪がたつぷりの塊にこれでもかとガーターは喰いこむが、瑞々しい弾力にはじき返されるを繰り返す。

「に、逃げ、なければはああつ……この、ような、好機……のがす、わけに、あつふうつひっ♡」

丈が短く切られたミニスカートから、巨尻に無遠慮にめり込むガーターと薄生地黒タイツに覆われた汁塗れで湿ったショーツが丸見えで羞恥を煽るのに、服装の絞めつけだけで軽く感じてしまうせいでミニスカートを雄々しいペニスが押し上げてしまう。

「はあはあ……逃げなければ……はやく♡」

シュコシュコ……。にちゅにちよ。シュコシュコ……。

花芯を挿んだ黒皮の防具手袋でカウパーが溢れかえり、廊下に水溜りができあがる。もう片方の手を壁について、一心不乱に花芯を擦りあげた。

「ンツ♥ つほお♥ はやくつ、はやつくうううつ♥ 逃げねば……ンツああ、あ♥♥ く、くつりゆううううう♥♥♥ ンツほおおおお。お。お。お♥♥ いぐ、いぐうううう♥♥♥ ちんぽ♥ ちんつぽつ! みりゆくうつ♥♥♥ いぐツ♥ ドビュドビュビュールビュールしながらイヤイツぐううう、ぐう、ぐう♥♥♥ ンおおおおつほおおおお。お。お。お♥♥♥」

どつびゆるるるるるるるるうううううう〜。

花芯から勢いよく潮が噴水する。両脚をガクガクと痙攣させ、腰がカクカクと前後へ動いた。舌がだらりと唇からはみ出して、恍惚に蕩けた表情のまま一分ほど硬直。

「……っ!?!……ああ……俺はまた……こんなことを……くそお!」

正気に戻ると酷く顔を歪め、火照る肉体を無視しながらノロノロと歩きだした。

魔王は時折人間の住処へ魔物を従え現れては国一つを滅亡させるほど暴れ回って財宝、食料、資源、あらゆるものを奪っていく。災害を具現化したような存在だった。

魔王の強奪は気まぐれにおこなわれる、十年に一度でもあれば、百年に一度、一年の間に何度も現れてとうとう国を滅ぼしたことも記録には残っており、いつ出現するかわからない魔王の存在に人々は怯えながら暮らしていた。

そんな人間へ天が鎧と聖剣を授けた。

選ばれし勇者のみが扱えるという、魔王の猛攻に耐えうる白銀の鎧と魔王の頑丈で巨大な体を斬ることができる美しい銀の剣。

その勇者の証を手にしたのは、王宮剣士であり魔王に故郷を蹂躪された過去を持つ青年だった。青年は魔王を倒す使命を授けられ正義と復讐に燃えた。自分が苦しむ人々を救えるのだと誇り高かった。

勇者として青年は魔境にある魔王城を目指して旅をし、旅の途中で多くの魔物を倒しさらに剣の腕を磨き強くなった。

そして魔王城へ辿りつき魔王へ戦いを挑んだ勇者は、秒殺で魔王に敗北。

特に最後、触手による一撃で勇者は魔王に尻を掲げて気絶した拳句失禁した。ジヨロジヨロと激しい音をたてて、一面黒色の大理石の床に湯気をたたせている黄金水の湖を魔王の前でつくりだす無様な姿を晒してしまふ。

一方、どういう訳だか魔王はいたく勇者を気に入る「我が騎士になり、我の牝となれ」と言ってきた。

勇者は拒絶。だが魔王も勇者の返答などハナからどうでも良かった。勇者の肉体を淫らに改造し、逞しかった胸筋は丸みを帯び敏感で淫らな乳房へ、小さく引き締まっていた尻はさらに淫乱で肥沃な大尻に、従順にさせるため呪術による洗脳で隷属精神の付与、他には発情と魅了も根深く刻み込んだ。

勇者としての鎧も聖剣も没収され魔王に仕える黒騎士として与えられたのは、極薄でサイズが一回り小さな黒タイツ、胸の形を強調するデザインの小きな防具、丈を短く切られて常に汁塗れで透けたショーツが丸見えのミニスカート、呪われたレイピアだった。

「魔王がかえってきてしまうっほおおっ♥ で、でも、少し……抜いてからあ……♥ おっおおっ♥」

現在、魔王は城中の魔物を率いてどこかの国へ久々の強奪行為に勤しみに向かっている。魔王に飼われてわかったが、魔王は非常に自堕落に過ごし、退廃的な享楽を好む。人間の国や街を襲うのも遊びの一種で、特に必要に駆られておこなっているものではなかった。それがさらに勇者の怒気を昂ぶらせ、呪いから精神を守っていた。

「はあはあ……まずは……どこかの教会で……呪いを解いてえ、ふうううっ♥ んあ♥ シュコシユコオオオ♥♥♥」

地方の小さな教会では強靱な呪いを解くことなどできないが、気休め程度にはなるはずだ。

（目的は、都市の大聖堂……あそこならはっふううっ。む、むねえ、動くなあ、し、尻も、お尻もむずむずする……ふう、ふううううっ！ 魔王、わたくしを殺さず手元においたことを後悔させてあげますわ！）

精神で凌いでいるとはいえ精神の半分以上は呪いに蝕まれている。尚も硬く張りつめた花芯を抜きながら、自分の一人称が変化していることにも無自覚なまま勇者は魔王城から

脱出した。

.....

（この、町には教会が、あつたはずだ……はあはあ……疼く体を……チ×ポで……違う！
聖職者の解呪で……鎮めてもらわない、と……はあはあ……ふうふううう♥ 聖職者の解呪
ザーメンをたっぷりケツマ×コで浴び……アアアアアアアアアアアア！！！！ 魔王！
魔王様め！ 人の思考まで弄りまわしやがって！）

真昼の町の隅っこで勇者はじつとしていた。夜になり人の往来がなくなつてから教会へ
向かうことにしている。なにせ、この町には一度来たことがあり、見知った人と出会うか
もしれない。魔王に変えられてしまった姿を人目に晒すことに抵抗があるのだ。

（一度は魔物であふれかえっていた国だが……どうやら、わたくしが討伐してからは……
無事そうだ……はあはア……♥）

ドオオオオオン。

平和な町に似つかわしくない砲撃音が響いた。一拍遅れて、魔物の鳴き声、悲鳴、破壊
音。破壊された門から無数の魔物たちが襲来し、人々を襲い目につくものすべてを破壊し
ようと暴れ回りだした。暴れ回る魔物たちの中心にいるのは魔王だった。

「なっ！」

（糞！ まさかここに来るとは！）

この身体では勝ち目などない。逃げるべきだと一瞬考えがよぎるが、

「や、いやだあ！」

幼い悲鳴、声の方を見れば子供が魔物に殺されそうになっている。

「待て！」

考える暇もなく体が動く。幼子へ襲い掛かった魔物をレイピアで振り払った。

「これ以上の非道な行いは、この勇者が赦さない！」

「おや、城でおとなしく留守番していると余は命じたはずだったか？」

「……っぐ」

勇者の登場に驚いたものの、魔王はすぐさま余裕たつぷりに気味悪い笑みを浮かべた。

「だが驚いた、アレだけ可愛がつてまだ正気を保つか」

「魔王様の思い通りになどりませんわ！」

「そうか、ふっ、ハハハ！ 余の思い通りの牝騎士にはならぬか、フツハハハ！」

ヌルッ。魔王の体内で飼われている触手が現れた。

触手は、鞭のようしなり蛇のよう這って勇者へ襲い掛かる。身構えていた勇者は、切り落としてダメージを与えてやろうと触手に向かって攻撃をしかける動きをとる。

「今度こそ、負け——ッ♥♥♥」

ぐにゆううう。ぎゅにゆうううう♥

触手は勇者の剣戟を避けながら、一切攻撃せず素早く背後へ回った。触手の先端がクパア、と綻び肉厚な六枚花弁となり、花弁が思い切りヒップを掴んだ。触手の内側に疣がび

っしりと生えており、花卉触手の疣が尻肉にどこまでも深く沈みチュウチュウと媚毒を注射してくる。

「~~~~~ツ♥♥♥」

からん。

ビック！ ビクビク！ ビククン！ ぶるっ！ ぶつるるる！

レイピアを落とした指先が震え、勇者の肩が仰々しく跳ね、足が内股になり痙攣しながら膝を打ち鳴らした。

むっぎゅ！

「お」

もう片方の臀部へも同じ触手がきて臀部を思い切り鷲掴む。

むぎゅ♥ むぎゅむぢむぢ♥ むぎゅ♥ むぢゅむぎゅ♥ むぎゅぎゅつぎゅむっ♥

触手が肥大な双丘へ喰いこむたび、粒の汗が肌に浮かんで体が朱に染まり瞳がひっくり返る。ミニスカートから汁塗れの勃起ペニスが顔を覗かせる。

むぎゅうううう♥ ギゅむううう♥

むぎゅぢゅむぎゅううう♥ ギゅむむむむむっ♥♥♥

「おっぴ」

強弱をつけ揉み回され、時折ただただ強く臀部を押しつぶされる。触手は勇者を魅惑的な尻を乱暴に愛撫しつづけた。ガーターだけでは不十分だった激しい桃色電流が何度も何度も、勇者の尻尻を蕩かしにやってくる。

むぎゆむぎゆつぎゆむぎゆ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡ ♡

「お♡ おお♡ お♡」

むぎゆむぎゆうううううううううう♡♡♡♡

「おつひいいいいいいいっひっひやアああああ♡♡♡♡ あ♡♡♡♡ い
ぐう、いっぐううううう♡♡♡♡ めしゆきしいちやうううううううう♡♡♡♡」

ブシヤアアアアアアアアアアア!

ガクガクツッ! ビクン! ガクツッ! ガクツッ! ビクンツッ!

その場へ膝をつきながら、腰が浅ましくもダイナミックに前後運動をする。連動して爆乳も跳ね回り、スカートを捲らすほどの潮吹きがずつつづく。

「ゆ……ゆうしやさま……?」

幼子は理解できない状況に怯え涙目で勇者を見つめてくるが、勇者はケツアクメに夢中で幼子の視線に気づいていない。

「這って来い、牝犬」

「……は、はひイ♡」

助けたはずの幼子の前で、大尻を左右へふりながら四つん這いで魔王の元へ向かう。四つん這いだと、爆乳が地面にくっついて乳首が擦れた。乳首が硬い地面に摩擦されるたびに、電流が乳を劈き、肛門孔が捲かれてブロボボ鳴きながら直腸汁を垂らす。

「さて、御主人様へ盾突いたことに対する謝罪の口づけをもらおうか」

足がだされると、牝騎士は魔王へ頭を垂れて恭しく魔王の爪先へキス。

「チュ、チュツ、チュツ♥」

「え、え、なに、勇者さま？ どうしたの？」

子供の声など聞こえていない。無心で魔王の足へ隷属のキスをする。

「オマエはなんだ」

「わ……わたくし……は……」

そのまま足先で顎をクイと強制的に上を向かされる。熱の籠った潤んだ双眸が魔王をみつめる。そこには勇者としての自分を保とうと足掻いていた青年の面影はない。

「魔王様を護る……魔王様の忠実な騎士、で……魔王様の牡チ×ポ様を癒す……牝……です」

「わかっているではないか」

ズッポオオオオ！

「ほっ?!」

ズブズブズウウウ！ ズヂユブヂユウウウウウウ！

ズブ！ ズッポオオオ！ ズブズブズッ！ ズッヂユウウウウウウウウ！

野太い触手がアナルを貫く。白目を剥いてアクメし潮を噴きながら背筋を反り返す。

腕ほどもある野太い触手による激しいストローク。アナルは榮々と触手を受け入れ、直

腸蜜で濡らす。

「おっひイイイイイイ?! おひ、おっひりいつぐううう う♥ ズボズボつでええええつイグ！ いぐいぐういぐういつぐいぐイッぐうううううう♥♥♥」

ぶるんっ。

ばるんっ。

ぶるんっ。

触手に奥を突かれるのに合わせて、重さを感じさせない重量級の乳袋が激しく飛び跳ねた。先端で小さく揺れ動く勃起乳首を魔王の手が掴み、爆乳を引き寄せて逸物を胸の谷間へ滑らせた。

ムギユツッ！ ギュムムツッ！

「ああああ、っひいいいっ♡」

そのままアナルを触手に犯されながらの魔王の巨根へパイズリ奉仕。Fカップはゆうに超える牝騎士の双乳から魔王の亀頭が飛び出てくる。勇者は舌を伸ばして、尿道口から滴り落ちる先走り汁を舐めとり、鈴口の溝を何度も舐め穿り、腫れぼったい唇が雁首まで啜えこむ。

むちゅ。むにゅううう。むにゅむにゅ、むちいいい〜♡

「は……はふい……♡ んちゅう、ちゆるちゆる♡」

胸は魔王の手に尻は触手に驚掴みされ、そのまま時計回りに揉み回されながら巨乳と巨尻を揺らして奉仕する。唇からは唾液が、胸の谷間へポトポト落ちていきパイズリの滑りをよくしてく。極太触手が埋まっているアナルは、ブビブビ鳴きながら直腸蜜を嘔いて触手を放さないよう強く絞めつけている。

「ふうううっほおおお♡ んちゅうううううずるるるるっ♡ ふぐ、ふつぐうううう♡

魔法少年を有効活用する幾つかの事例

【ルビー&サファイヤのアナルゼリー相撲】

「おお……おっひい……」

「く、ぐるじい……」

赤色のコスチュームに身を包む魔法少年ルビー、

青色のコスチュームに身を包む魔法少年サファイヤ、

二人はいま床に背中をくっつけ互いの臀部をくっつけ、てまんぐり返しの状態で拘束されている。

二人の縦割れアナルには透明な双頭アナルバイブが挿入され、透明なバイブの中には赤、紫色のゼリーで満たされていた。赤色のゼリーはルビー側、青色のゼリーはサファイヤ側、紫はその真ん中。

『ピンポンパンポン♪ え〜〜テスト、テスト。アジトのみんなおまたせ〜〜！ 週に一度のみんなのアイドルペット魔法少年ルビー&サファイヤによる体を張ったお楽しみ勝負の時間だよお！ 負けた方はとうぜんペナルティ！ 任務帰りでチ×ポバキバキに勃起させている怪人たちにご奉仕セックスをしますす♪』

「ひいっ」

「っ」

少年たちは天井のスピーカーからの声に身を強張らせる。

二人は怪人やクローン構成員の下っ端怪人たちに日々休む間もなく、犯されて性欲の捌け口にされている。眠るときは気絶、敵の改造魔術によりザーメンで生きていける故食事時間も無い。

唯一の安息を得られる手段は、アジト中に生中継される悪趣味なゲームに勝つことのみ。『それじゃあ、ゲームルールを説明するね！ 今回はアナルゼリー相撲！ 自分のケツマ×コを思いつきり絞めて、真ん中にある紫ゼリーを相手のケツマ×コにブチこめた方が勝ちだよ！ それじゃあ、スタート！ ぶびぶひケツマン鳴らしやがれ♪』

スピーカーからラッパのスタート音が鳴り響く。
休みなくつづく怪人たちからの輪姦で疲労し精神が擦れ切っている二人は、このゲームに自分自身が勝つことしか考えない。

「く、お、んっふうううううう！」

仲間であるサファイヤには悪いが連日の肉棒奉仕活動で心身共に疲労しているのだ、何としても休息の時間がほしい——ルビーは勢いよく下腹部に力をこめて赤色の媚薬ゼリーを押し込んだ。

「んお おおお お♥ ほっひいいいい、ま、まげつりやいんらがアあああ あ♥♥」

ぶぢゅぶぢゅううううううっ！ ぶびぶび！ ぶぢゅうううううう！

取り付けられている超小型マイクがゼリーが動く音、直腸汁の音まで拾い上げ大音量で

羞恥心を煽ってくるが、恥じている暇はない。

「んっごおお!!」

ゲームスタートから間もない急な圧迫感にサファイアは白目を剥く。ただでさえ、直腸一杯に詰め込まれている青色のゼリーの圧迫感で堪らないのに、そこに紫色のゼリーが一気に挿入され、下腹部がぼつてりと膨らむ。

「お♥ んほおお♥ お♥ おおおっほっおおお♥♥♥♥」

じんわりと腸粘膜に吸収される媚薬効果。大腸から直腸が一気に媚薬を粘膜吸収させてさっそく肉体が牝アクメしだし、だらしのない表情を浮かべながらブルブルと全身を痙攣させるサファイア。

『おつと、ルビーちゃんのケツマンアタックにサファイアちゃん早速、ゼリーでメスイキ！これは勝負にならないかあ〜?』

「お、おほっひい♥ ぼ、ぼっくらっで、やぢゆみらいい。んらがらああ♥ ふ、つぶうう〜ふつううんっ〜ううう♥♥♥」

ぐぶぶ、ぶぢゆ、ぶぢゆうううう……どっぢゆるン!

気弱に涙を浮かべながらもサファイアは下腹部に力を込め、排泄の容量でゼリーを押し戻す。どにゆつるん、と滑らかに媚薬ゼリーが腸皺を愛撫していく甘美に涎が垂れる。

「〜っおお♥」

じゆるん……ずっりゆん……どっりゆん。

初手で一気に体力を消費してしまい押し戻せないルビーは、ゆつくりとした絶頂を味わ

った。媚薬ゼリー大きいが柔らかいため排泄器官を拡張されても痛みはなく、じわじわと媚薬が腹の奥へ押し込められていく恐怖と快楽に苛まれる。

「ごっごっろお……♥ てめえゆるひやれえからあ♥ お♥♥♥♥」

「ひゃいひよに、ひてきたろはあ、そつちろくへにい♥ んっふうううう！」

罵り、力のない目で睨み合いながら二人同時に括約筋に力をいれた。

ルビーはゼリーを押しだすために、サファイヤは最後の一押しのため。

ぶつちゅっぶふうううううううう！ ぶびゅびゅびゅびゅぶつびゅうう！ ぶぶぶぶ

ツポオオオオオオ！ じゅりゅん、ズッポ！ じゅつるん、ズッポ！ じゅつるるん！

「ほっひほっへふっひいいいいいいひっへああああ♥♥♥♥」

「あっ♥ いぐいぐいつぎゅうううううううううううううう♥♥♥♥」

瞳をぐるんつと回しエキキ狂う魔法少年。

一方が排泄快楽に酔い、もう一方は異物挿入の快楽に酔う。片方の下腹部がポコンと膨らんだかと思えば、次の瞬間には別の片方の腹が真ん丸となる。

「まげっりよおおおお♥ まげりよよおおおおひいいい♥♥♥♥」

「そっちがまげっりよおおおおんほおおっひいいい♥♥♥♥」

ガクガク！ ビユルルウルル！ ガクガクツブルルツ、ぶつびゆるうううう！

固定されているというのに、二人の肢体はこれでもかと激しく身震いし、アへ顔しながらスカートでテントを張っている花芯から何度も白濁ミルクを噴射させた。

『ここでお知らせ、お知らせ〜。アナル相撲終了まであと一分を切りました〜紫ゼリ

「は丁度下真ん中、このままだと二人揃って仲良く朝までご奉仕コースかなあ♪」

「い、いやらあああ♥ お、おつ、おつひイイイイ、ふ、ふうううんつぢゅううう♥♥♥」

「おつごお?! さ、さふあいやあ、てめえ……ゆるひやれえがらなあああおお♥ お、俺、俺らつでえ、お、おおおつ♥ ング、おおお おお♥♥♥」

輪姦される未来に身震いし、かつて仲間だった相手へ容赦なくアナルゼリーをブチ込もうと何度も腹に力をこめる。

ぶりゅぶりゅ、ぶびぶびおぶび。 ぶぼぶぼおおおおおお! ぶつふううううぶつぢゅううぶつううう。

下品な音がとまらない。スピーカーを通して可憐な魔法少年の排泄音がアジト中の観客に知れ渡る。

『はあい、タイムアップ! アナルゼリー相撲はあああ〜ルビーちゃんの勝ちイ! 敗者は残念でしたサファイヤちゃんです〜♪ ざあ〜んねえん♪』

透明な筒の中、赤と青に挟まれている紫ゼリーは誰が観てもわかるぐらい、サファイヤに寄っていた。

「あ、あああ……♥」

「や、やつひや……か、かつひやあ……♥」

絶望と歓喜、正反対の感情のはずだが二人は揃っておなじアナルアクメに酔いしれて、下を垂らしだらしなく表情を緩ませている。四肢を揺さぶり、勃起したままの花心からは

とろとろと白濁蜜を垂らしつづけている。

『それではサファイアちゃんはペナルティとして朝まで肉棒ご奉仕コース♪ もしかしたら一週間ぐらいかかるかもしれないけど頑張つて♪』

ウイン。部屋で出入り口から下半身を隆起させた怪人が、数えたくないほどの人数でおしよせてくる。

「ゆるじてやめでこれいじょういっただら、ぼくぼくんほつごおひっひいひい♥ けちゅま×つごおお お♥♥♥ ずぶずぶぎっひゃんぶううあぶぢゅうう!!!」

体格のいい怪人に拘束とパイプ挿入を解かれ、捕まり、種付けプレスされる。ジタバタとするブーツしか見えなくなつたが、どぶびゅるるる! と激しい濁音射精が聞えると暴れていたブーツは大人しく震えるだけになつた。

『勝者のルビーちゃんにはご褒美としてお腹一杯の媚薬ゼリーをプレゼント♪』

「え?」

どつりゅん、どつぢゅん! パイプが真空バキュームを発生させ、赤青紫三色分の媚薬ゼリーが一気にルビーの直腸から小腸へ詰め込まれた。

「~~~~ツツツ♥♥♥ や、やぢゅま、ぜつでぐれつるはずじゃ……?!」

「~~~~? 勝者は休憩できるなんて一言でも言つたかなあ~~~~?」

「しよ、しよん……ら♥」

『うーそびよん♪ ちゃんと休ませてあげちやうよ~~~~? 百回ぐらいケツマンコでメスイキしたらね!』

ブヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ〜！！！！

双頭パイプが回転しだし、腸壺と媚薬ゼリーを攪拌し三色ゼリーがぐちゃぐちゃに混ぜり合う。

「〜〜〜つ お♥ いぐいっぐいぐううううげぢゅま×つご おお おお おお
♥♥♥ ぐぢゅぐぢゅがきまぢえらいっでいぐりゅろどまんらぐりやつりゅんツホッお
お お お お お ♥♥♥」

今日も今日とて、魔法少年は怪人たちのおもちやなのだ。

【アメジストのザーメンタンク】

アジトの一角に【タンク】とラベルの貼られた場所がある。透明なガラスに仕切られたそこには、一人の魔法少年が機械に拘束されている。

「んぶううう……ふうううう……ふつぐううう……」

四つん這いのまま、手足を床に塗り固められて拘束されているのは魔法少年アメジスト。目元は機械のアイマスクで隠され、アメジストが興奮するたびに桃色に輝く。

口には呼吸器が装着され、新鮮な酸素と一緒に大量の催淫ガスと怪人ザーメンがアメジストの口へ送り込まれていく。

ズズズ……。ズゴゴ……。ズズズ……。

「やべ、んつぶうううううごつぶうううんぢゅううううう♥♥♥」

どろどろの怪人ザーメンが喉を嚙下し、胃袋を満たすたびにアメジストは精飲アクメに酔いしれ、肥大化した尻を震わせるのだ。いけないとはわかっていながらも喉を鳴らして敵の子種汁を啜るのがやめられない。快楽のパラメーターを示すデジタルアイマスクは常に桃色に発光する。

「んぶううううんぢゅううううう♥♥♥ごっ♥♥♥ごっ♥♥♥ごっぐごっくごっつくくううううう♥♥♥んつぶうううう、ぶつぢゅうううう♥♥♥ずつぢゅううううう♥♥♥♥♥」

……とぶとぶ……どぶぶ……どぶぶ……。

魔法少年を捕らえているタンクの真下から白濁液が滲みだす。ゆつくりと、しかしとま

ることはなくタンクを満たし始めた。

「ツンホ?!」

白濁がアメジストの爪先に一滴程度、触れる。それだけでアメジストは激しく身悶えし、パニエから花芯を勃起させた。

「や、やっべ、せ、えいつぎつでイグからああ♥んつぶうううう♥ごくごつくうう♥せ、い液、あびるだけで、いつでひまうろお♥んぶううごつくつくうう♥い、いまつも、お。お。お♥♥♥ンツヒ、ザーメンあいつぶでいつぐううおお♥♥♥」

彼は精液を肌に浴びるだけで絶頂できるように改造されていた。拘束されている体で精一杯仰け反り、絶頂しないようするが口からは延々と白濁汁が注ぎ込まれており、結局は連続絶頂の最中にいる。

「んぶづううぢゅう♥ま、あ、つで♥んぶううつれ♥♥♥んぶ、ぶううう、ぶつぢゅううううぐぢゅううううンツゴツツ〜♥♥♥」

とぶとぶぶ……とぶぶぶ……どぶぶぶつ、どぶぶぶぶぶ……。

床から滲み出る精液のスピードが跳ねあがった。一分足らずでアメジストの下半身をネバネバザーメンが呑み込みコスチュームへべったりとへばりつく。顎の先まで到達するとマスクが外され、狭いタンクの中に魔法少年の哀れな嬌声が響き割った。

「やべ♥つごつぶううう!んつぶつぢゅうつぐつご♥おっぼ♥おつぶうううぶつぢゅう♥ぼつびゅうう?!うううびゅううう♥♥♥んぶううう、お、おぼつべつびゅ!ザーメンべつぶつぶううううびゅううう!!!」

水分が吸収され硬くなった桃色の塊がゆつくりとヒリだされていき、その間は快便感でケツアクメをし、ついでとばかりに少量の吐精。

三十分ほどかけて排泄が終わり、すべてを出し切った頃には腹はへこみ胃袋も空っぽ。

「へえー……はああー……ふっへえー……んごお?!」

そして排泄快樂の余韻を味わう暇もなく、マスクが口元へへばりつき新鮮な酸素と催淫ガスとどろどろの濃厚精液を送ってくる。

ズズズ……。ズゴゴ……。ズズズ……。

「おツぶうんぢゅううううう♥　ズゾゾ♥　ゾぞぞ〜ツ♥♥♥　やべ、んつぶううううう♥♥♥」

マスクの稼働音を掻き消すほど音でザーメンを啜りながらアメジストは透明なタンクのなかで繰り返し悶えつつづけていた。

ヒーロー牝牛ペット計画

穏やかな天気の日曜日の、ある街の風景。

映画館へ恋人が仲睦まじい様子で歩いていき、女子高生たちがお揃いのキャラクターカチューシャをつけてゲームセンターから笑顔で出てくる。大学生らしき集団が駅に向かって走っていき、ファミレスの窓際の椅子に座った子供が行き交う車を夢中で眺め、その様子を両親が微笑ましそうに眺めている。

そんな絵にかいた平和が広がる穏やかな日曜日。

「ケケケケッ！ 人間共お、楽しい、楽しい地獄の時間だぜえ！」

奇怪な笑い声が響いたかと思うと、突如街に並ぶビルの群が次々と爆発していった。

悲鳴と混乱が周囲をつつみ、大勢が逃げ惑っていると怪人たちが現れる。片っ端から逃げまどう人々を捕まえていき、適当に目についた建物を破壊し、適当に入った店から金目の物を盗んでいく。

「『貴様たちの悪事もそこまでだ！』」

怪人たちの前に現れたのは五人の戦士。この街の平和を護るために日々戦う、正義のヒ

ーロー。

「いくぞ、みんな！」

「「おう！」」

リーダー格であるレッドの言葉に四人がそれぞれ動き出す。

レッドはその場に一人残り、現場を指揮していた怪人と対峙する。

「ケケケ、また性懲りもなく現れやがったな！」

「貴様らを倒すまで、俺たちはいつまでも戦いつづけるからな！」

「ケツ、テメーらと戦うなんざ嫌なこった！」

「逃がすか！」

言うや否や怪人はこの場から逃げ出した。人間とは比べ物にならない身体能力での逃走だが、ヒーローであるレッドも抜きんでた身体能力を見せつけながら追いかける。

その様子を確認すると、「フリ」をした怪人はほくそ笑み、事件現場からレッドを引き離すようどんどん逃げていき人気のない道の曲がり角へ駆け込んだ。

「待っつぐううううう?!」

プシャアアアアアアアアアアアア。

レッドの予想では角を曲がると、数メートル先を走っていると思っていた怪人が待ち構えていた。そのまま、顔面目掛けてスプレーを噴射してくる。

謎のガスを思い切り吸い込んでしまったレッド。急激に思考が鈍くなり、睨が重くなっ
ていく。

「……あ、なんだ、これは……」

「ケケケケッ！ 我らが魔王様が、テメーを連れてこいと命じたんでなあ！ 俺様たちのアジトにご招待するぜえ、レッドお！」

「……ぐ、うう……」

怪人の高笑いを聞きながら、レッドの意識はぶつんと途切れた。

レッドが目を覚ますと、既に敵のアジトに連れて来られていた。

なにやら椅子に座らせたまま拘束されており、目の前には侵略者たちのリーダーであり怪人たちの統治者である魔王が立っていた。

「やあ、初めましてだなレッド」

「ぐっ……俺を連れてきて……何が目的だ」

「我々はいままで、地球人を怪人改造の素材と苗床として確保してきたが、牝ペットとしても需要がある可能性に気がついた。だが、地球人に牝ペットの素質があるかどうかは不明だ。だからまず、そのペットの試作品としてオマエを選んでやったのだ」

「は……？」

予想していなかった敵の答えに理解が追いつかない。しかし人間を愚弄していることだけはわかる。レッドは怒りに燃え、魔王を睨みつけた。相手は笑って一蹴するのみ。

「レッド。まずは牝牛ペットに改造して私直々に飼ってやろう」

「誰がそんなこと、ふざけるな！ 俺は貴様の玩具になどならないぞ！ オマエの下らない企みの思い通りになるものか！」

・
・
・
・
・

侵略者の牝牛ペットにされたレッドの新しい生活が始まった。

自力では出ることができない専用の部屋を与えられ、扉には【牝牛ミルクの部屋】とわざわざプレートがつけられている。部屋の中は、牛の畜舎をイメージして藁と柵でインテリアが施されており備え付けの搾乳機まで置かれている。

「んぶ……ぶぶぶ……」

反抗的態度による無駄吠え癖があるため矯正のマスクをつけられていた。

男根の形をしており、地球外惑星に生きているワームが改造されたもので、うねうねと自ら動く生きたマスク。矯正マスクは言葉を喋ろうとしてもワームの呼吸音に変換される代物だ。

「ふー、ふうううう、ふうううううっん♥」

びゆるぶつぽおおおおおお〜！

空気に肌が触れるだけで感じたレッドにあわせて、マスクワームが先端を尖がらせビューと白濁を噴き上げる。まるで口から射精しているようなヒドイ絵面。

マスクワームは装着者の唾液や汗を餌としており、怪人たちの改造によりワームが食べきれない唾液や汗を白濁色に変換して吐きだす仕様になっている。

ワームの排泄は装着者の絶頂にリンクしており、さらに装着者はマスクワームと感覚を

共有しており、ワームの排泄に絶頂してしまうと、マスクも再び排泄をおこない……ひたすら下品なループがつづく。

この恥辱的な行為を辞めたい者は、マスクワームを装着したくないがために大人しくなり無駄吠えを辞めるようになるのだ。

「んっふ……ふっぐうううう……うううう〜！」

ご丁寧な目に届く位置に姿見があり、生きた男根マスクが顔に張り付いている姿が映る。下品なマスク以外にも目にしたくない恰好が目飛び込んでくる。

牛耳型の洗脳ヘッドフォン、耳のタグ、鼻輪、牛柄のグローブとニーソックス、ビキニとショーツ、牛尻尾のアナルプラグ。そして牝牛ペット歩行矯正触手アーム、これのせいで二足歩行で歩くことが叶わず、四つん這いで部屋を這い歩くしかない。

「ふー、ふううううう……」

今の姿が嫌でたまらないと身を振って嫌々すると、牝牛ペットらしく首輪につけられているカウベルがリンリン鳴った。

「元気にしていたか、ミルクちゃん」

牝牛ペットであるレッド、否、ミルク——の餌が入った犬皿を片手に持って魔王が部屋にやってくる。

「さあ、餌の時間だぞ」

「……………っ」

置かれた犬皿にはたつぷりのザーメン。

「ぶっぽおお！ んっぽおおおおおおお！ んぼおお！ つぽおおお！」

ワームマスクが膨らんで縮み、下品な音を鳴らす。

ワームは装着者の唾液や汗以外にも精液を好むよう改良されており、餌を前に興奮すると勝手に鳴きだし餌が食えるまで鳴きやまない。そして同じく、使用者の意志に反して餌を食らおうと歩行矯正器具の触手が使用者を四つん這いに歩かせだす。

「ぶっぽおおお!! つぶっぽおおおお!!」

（嫌だ！ やめろ！ いやだア！）

首を振って拒否するが、カウベルが鳴るだけだった。元ヒーローの意思だけではどうにもできないまま、犬皿までたどり着く

「ほらほら、啜らねばその下品な牝音は鳴りやまぬぞ？」

（こ、こんなもの、食べれるわけ……!）

「んぶうばおおおおおおお〜!」

ヒーローだった牝牛は涙を零しながら、四つん這いでかがみ皿に口を近づける。ワームが勝手に動き出し皿へ勢いよく口をつけた。

ジュル、ジュルルル！ スッチュルウウズツズオオオオオオオオオオ!! スヂュルルルルルル！ ジュズゾオツズブウウウウ〜!!

「ンンっくううううううう♥♥♥ ぢゅぞおおおおおおおおおお♥♥♥♥♥」

肉棒マスクと歩行矯正触手が下品な音をたてながらザーメンを啜り上げていく。さらにマスクワームは激しい鳴き声すらあげる。

「ンボおおおおお♡　ンボおおおおおおおお♡」

（の、喉マ×コおおおおつほおおおおお♡　かんじりゆうゆう、ザーメン飲むだけでか
んぢつでいっくうういっぢやうううううううううう♡♡♡♡♡）

精液を嚙下するたび脳が痺れるほどの快楽刺激を分泌される。腰がカクカクと前後に揺
れて、ぶちゅぶちゅとアナルから直腸汁が漏れだしてくる。

「どれどれ、美味いか牝牛」

「んぼおおお♡　んぼおおおぶびびつきいいいい♡♡♡♡　ンッもおおおおおおおお
♡」

（やめろやめろおおおお！　変な声をだすなああああああ！）

飼主の問いに、マスクが無様な鳴き声で返答してくれた。

肉棒マスクはレッドの心を折るには充分すぎる威力を発揮していた。

「牝牛、散歩の時間だ」

「ぶつぽお♡」

（いやだあ！　外は嫌だ！）

リードを首輪に結着され、そのまま勢いよく引つ張られて部屋から出される。

アジト内を連れ回されるのは恥辱でしかない。怪人たちからニヤニヤと下品に笑われ、

さら監視カメラの映像はアジトのデータに保管され、アーカイブ化されるのだ。

「ぶぎいいい、ぶつひいいいんぼおおお♡」

ぶるぶるつと震えがとまらない。四つん這いで歩きながら絶頂する。

「此処が魔王城……」

「城、と言うより塔だけだな」

曇天を突き破らんばかりにどこまでも高く伸びる漆黒の螺旋。その城はさらに堅牢な鉄門に囲まれ、警備兵も待機している。

魔王城から距離のある森林から勇者とその仲間たちは望遠鏡でこっそり様子を窺っていた。

「魔王がいるのは、間違いなく城の天辺です」

「問題はどうかやって侵入するか」

「門の材質的に人間界にはない鉱物だ。あれだけツルツルしてれば、兵の隙を見てよじ登って忍び込むという手段は不可能だ」

「盗賊の道具を使ってもか？」

「ダメだな。さっき確認してきたが扉の鍵穴も特殊で、兵の使っていた鍵も人間社会で流通していない物質で造られていた。鍵を造って侵入も難しいだろうな」

「……一つ方法があるかもしれない」

悩む仲間たちに戦士ファムがここで初めて声をだした。

「ああ、そうかファムのお師匠は……」

「いいから、こつちだ」

勇者の声を遮り、フアムは城からはなれて森の奥へと進んで行く。

暫く歩いているとゴゴゴ……と、水の音が聞こえやがて大きな滝つぼに勇者たちは辿り着いた。

「滝だ」

「あの大きな岩穴の切れ目から、滝は流れているんですね」

魔導士が指摘した通り、巨大な滝は大きな穴の切れ目から流れていた。穴の切れ目は洞窟の出入り口のようにも見える。

「この滝は魔王城の下水と繋がっていると聞いたことある。あの滝が流れている穴の中心にかして入って、川をつたっていけば城内の地下に出ることができる……かもしれない」

「なるほど」

「けど、その話を俺にそれ教えた奴がいるんだ。向こうだって俺たちがこつちのルートを伝って城に入ることを考えているはずだ。」

「フアム」

「おいおい、これから最終決戦だつてのに辛気臭せえツラすんじゃねえよ勇者様がよ」

勇者の肩を叩く。

実際、正門からの突撃はリスクが高いとして一同は滝を通って洞窟の中から城を目指すことで意見が一致。盗賊の道具と魔導士の力により岩穴の切れ目へ無事に入ることができ

た。そして中に入ると、中は洞窟のようになっていた。水場が近いせいか岩は湿って滑りやすく、さらに思っていた以上に狭い。そんな場所でも野良の魔物が跋扈しており、いなして進む。

しばらく歩くと、唐突に広い空間へ辿り着いた。しかも向こう側には階段が造られており、灯りを確保するよう岩壁には壁掛けのような燭台が一定間隔で設置されていた。

「明らかに人が来ることを想定した作りだな」

「あそこに古びた洗濯桶と板がある。魔王城の侍女が使った仕事場の一つなのかもしれない」

自分たち以外にない空間。しかし妙にピリピリとする。

警戒しながら向こう側の階段を目指す。

「——ッ、勇者！」

「フアム?!」

フアムが勇者の背中を蹴る。次の瞬間には勇者が立っていた足元の岩肌が抉れ、数秒後にドロドロに溶けてしまう。

「キサマはっ」

「魔王直属に仕える魔人四天王の髓」

音もなく現れたのは仮面で目元を隠し、黒いフードを被り大きな蠍の尻尾をもつ魔人。

口元や腕を布で覆っているが、指先から毒が滴り落ちて布は変色している。

四天王の髓——魔王直属の殺し屋であり、毒のエキスパートの蠍の魔人。

勇者たちの前に直接現れたことはないが、畏を仕掛けたり、部下の暗殺者を仕掛けたり、嘘の情報を流布して人間たちから勇者たちを孤立させようとしたり……直接ではなく裏から手を回してありとあらゆる妨害工作を仕掛けつつつけてきた。こうして顔を見るのはお互い初めてである。

「今まで顔を見せなかったアンタが直接出向いたってことは、此処は本当に城の内部に直通してゐるってわけだ」

「……………」

髓は無言のままだったが勇者はそれを肯定とし、魔王撃破のためにもここで戦力を削ぐうと剣を抜こうとした。

「ここは俺に任せて、行け」

「フアム!？」

しかし勇者を戦士フアムが制す。

「髓と一人で戦うつもりなのか？」

「嗚呼、アイツとはもう師弟でもなんでもない。俺の中に一切の迷いはない。拾われて育てられた恩はある。けど、俺は人間で、人類が支配されるだなんて黙ってられねえ。俺らが死ぬか、連中が死ぬかしかねえなら、俺は迷うわけにはいかねえんだ」

「……………」

髓はだんまりとしたまま何の反応も見せない。

「フアム……………死ぬなよ!」

「テメーもな」

フアムを残して、城内へつづく階段へ走っていく勇者たちを魔王直属の幹部髓は黙って見ていたが、二人きりになり、ようやく口元の包帯を少しずらして喋りだした。

「友達か？ 粗暴なオマエによくできた。驚いた」

「……………ハッ、いまさら親面するんじゃないぞ」

数年ぶりの敵対しての再会だというのに開口一番が「友達か？」。ズレた言葉に一瞬面喰ったものの、黒いフードの男を睨みつける。

髓は孤児であるフアムを拾い育てた義父であり、戦い方を教えた師であった。詳しい過去は知らない。ただ元は人間だったらしい。漂流した先で人狩りに遭遇し、奴隷として虐げられつづけて苦しんだ果てに今の主人に救いだされ、恩義を感じて忠誠を誓った。その主人が魔王だった、ただそれだけ。

（瞬きなんてしたら一瞬のうちに死ぬだろう。瞬き厳禁だぜ）

剣を抜くと同時に背後に立たれている。

すぐさま距離をとり、心臓目掛けて剣で斬りつける。が、剣先を三本指だけで掴まれる。髓の毒がすぐさま刃に浸食し腐蝕しながら、ジワジワと刃から柄まで毒が広がっていくので放り投げて捨てる。

「クソ」

（やっぱりコレしかねえな！）

ナックル

拳鐐を装備し拳を握る。

毒使いの髄は蠍の魔人であり全身から毒を分泌させることができ、近接戦は不利。が、フームは幼少期をその髄と暮らしており、肉体を毒に慣らす修行をしていた。毒の耐性があつた。髄に対して唯一物理攻撃が可能だと自負している。

勇者たちを先に行かせた理由もこれだ。

「ソレでくるか」

髄も包帯を巻いた拳を握り、構える。そのまま互いの拳がぶつかりあう。

師の拳が頬を掠めるだけで小さな切傷ができてしまう。諸に打撃が入れば骨は易々と折れるだろう。

同時にフームの拳が髄に直撃すると数回の攻撃で、拳鐐は腐り錆びて使い物にならなくなつてしまった。だがフームの拳に毒によるダメージが入ることはない。

（このまま、俺とアンタのシンプルな攻撃力だけで勝敗が決まる！俺はアンタに勝つて、勇者たちのものに行かせてもら、う……ぞ!!）

「……………?? ……カハッ?!」

急に視界がブレたかと思うと、強烈な頭痛と立ち眩みとふらつきで倒れ込んでしまう。血すら吐いてしまう。

チリチリとした首筋の小さな痛みが気づき、触れてみると髄の尻尾の先端からとびでた毒針が首筋に突き刺さっており、毒が注入されている。

(なんで、だ……お、俺に、師匠の毒は効かないはず……)

旅の際の戦闘でも、自分だけは毒に関する攻撃は浄化魔術の施しなしで無効化できていた。

「ファム、オマエは確かに私の毒を注いだことで、他の人間よりも毒に対する耐性が強い。でもその耐性力は八割ほど……それ以上の濃度の毒を摂取してしまえば他の人間たち同様倒れる」

(うそ、だろ……まだ上限があつたの、かよ……)

「オマエ、私の毒に完全に慣れ切る前に突然家出したから……」

倒れた弟子の首から毒針を引き抜く。

既にフェムは筋肉に力が入らず寒気すらして意識が朦朧としており軽々と抱き上げられてもなんの抵抗もできなかった。

「オカエリ。不良息子、うんとお仕置きしてあげる」

.....

見覚えのある部屋、見覚えのある天井、見覚えがあるベッドでファムは全裸でいた。

うつ伏せで背中に両腕を回した状態で縛られ、脚を折りたたまれ、姿勢を崩さないように紐と棒で拘束されている。

(これは、いつものヤツだ)

無意識にファムは震えていた。幼少の頃、何度も味わった髓のお仕置き。

「年単位の家出、城の機密経路の漏洩、魔王様への反逆行爲……うんと、悪い子」

（こ、こいつ……本気で俺がただの家出をしたんだと考えているのか？）

髓の元を離れる際に、きっぱりと「価値観が相容れない」と縁を切ると宣言して此処を飛び出したのだ。

しかし、とうの師は弟子の尻を呑気に触っているだけ。

「謝ったら、許してあげないこともない」

「謝るもんか！」

髓に屈するということは、魔王に屈することにもなる。人々を護るために折れるわけにはいかないのだが、師は弟子の覚悟に対していかにも「あーやれやれ」と言いたげに首を横にふるだけ。

「なら、お仕置きするしかなし」

髓は浣腸器を準備し拘束され動けないファムの尻へ、先端を押しつけた。

ズツチユチユチユチ……！

浣腸器の中の薄桃色の液体が、一定間隔でシリンダーに押されて直腸へ注ぎ込まれていく。薬液は冷たいが、粘膜に触れた途端悶えるほどの熱と痒みを引き起こし、耐えようとファムの肌には脂汗がびっしりと浮かんでいる。

「毒には耐えられる子だけど、媚薬には負けちゃう可愛い子」

「ソツクウウ……い、いつまでも……ガキ扱いするんじゃねえ……！」

「嗚呼、そうね。フアムはもう大人。なら大人と同じ容量をあげないとね」

(クソ……!)

一本目よりもさらに一回り大きな浣腸器が突きささり、シリンダーがゆっくり押されていく。

ヂュブ、ヂュブ、ヂュブ、ヂュブ、ヂュブ……。

「ンア~~~~!!」

(あ、あつ……体が熱いイイイイ! 燃えるっ、燃えてる ぐう!!)

追加の媚薬は一本目の効果もありすぐさま淫熱の嵐でフアムを襲ってきた。尋常ではない汗が滝のように流れつづけ、肌はどこもかしこも真っ赤に染まっている。触れられない乳首や肉棒もシートに少し擦れるだけでスパークじみた悦が走ってしまう。

「ふつぐう……ぎい…… ああ……!」

(く、つくるしい……は、腹が裂けるう……!)

そして二本分の浣腸剤は圧倒的な物量でフアムの腹を苦しめた。ギルギル、腸鳴りが絶えず響いてくる。

「嗚呼、そんな可愛い顔……♥ お仕置きの意味なくなっちゃう……」

クスクスと腹痛で顔を歪ませている弟子を微笑ましくみつめ、どろどろの汗で張りついた額の前髪を髓が拭い、汗を拭う。

(こ、コイツ、本当に……常識がズレてやがる……!)

「フアムはもう大人だから、栓も大人専用のモノにしようね」

——ズポツチユウ！ズブブ……グヂユウ！

「おごっ?!」

浣腸二本分で一杯一杯の下腹部へ、浣腸器の先端よりも圧倒的に野太い鍬の梁型。栓をされ排泄を阻止されてしまう。菊皺はミチミチつと悲鳴をあげている。

(く、くるぢ……)

「メツ、コレはお仕置き」

「ぐう……!」

苦痛のあまり、ゆつくりと梁型を引き抜こうとした。しかし悔しいかな、ファムの肉体は記憶と経験の蓄積により師匠の言うコトに従い、梁型をひりだそうとするのをやめてしまう。

「じゃあ、お仕置き」

髓の手には鞭が握られている。

「ギツつ、ぐつぐうう……ぐつぐううう……!」

パシン！パシン！パシン！

排泄欲求暴発寸前の尻目掛けて、容赦ない痛みが追加される耐える余裕がないどころか、戦いで慣れたはずの痛覚を敏感に感じ取ってしまう。

「ほら、昔数えたとおり百数える」

「そ、そんなこと、するか……んぐううう……!」

(アンタが根をあげるまで我慢してやる！もうガキの頃の、泣くだけの俺じゃない！)

……絶対、こんどこそ……師匠にまけたりなんか……)

負けたくない一心で唇を噛みしめた。

パシン！ パシン！ パシン！

慣れた手つきで鞭が何度も臀部を強かに打ってくる。痛いのは勿論のこと、浣腸されたモノを吐き出してしまうのでは、という恥辱の未来を考えてしまい身が竦んでしまう。

「……一旦薬、出血防止」

だいぶ叩かれた臀部は真つ赤で赤くヒリヒリとした熱い痛みを発していた。

「ッ」

(あ、あ、まずい……)

ファムの表情が強張るがそれは一瞬だけ。すぐに元の表情に戻る。

髓が懐から小瓶をとりだした。中身はとろみのある液体。ひりつき熱をうんだ臀部へ少しだけ垂らす。

「くう」

「ちやんと覚えている。オマエが泣きじゃくるのはココから」

「いつまで、そんなガキだと思ってやがる。ケッ」

むぎゆう。むにゆううう。むんにゆう。

とろみのある薬に触れた箇所は冷たく、熱が沈静していく感覚に心地良さを覚えてしまう。髓の包帯だらけの指が肉に下味をつけるように揉んでいく。師の指が臀部へ触れるたびに肌をしつとり吸いつかせ、ファムの下半身は砂糖菓子をゆつくり溶かしていくような

甘い衝動に苛まれる。

「……ぐっ、つぐう……んっ」

「大きくなつた尻、感触も感度も増してる。友達とも遊んだか？」

「んなわけあるかっ！ このつ変態野郎、いい加減放せ！」

「嫌なら百数える」

パシン！ パシン！ パシイン！！

ふたたび鞭責め。葉でつやつやの臀部に先程より小気味の良い音が響く。

「ふっぐう、んっぐううう〜！」

（まずいっ、まずいっ、まずいイいっ）

叩かれる痛みも、腹の中で蠢く排泄欲求も確かにある。が、痛みに混じりジクジクと尻肉の奥底で燻りだしてきていた。

ここまでの流れをファムは、幼い頃から何度も味わってきた。肉体に深く刻み込まれて記憶されており、次にどんな反応をしようかもうも理解している。

「ほら、お尻からやらしいのがでてきた」

「やあ、み、みるなあ……！」

パシンっ！ ビュブツ。パシンっ！ ビュブツ。

パシンっ！ ブブツ。パシンっ！ ビュブツ。

燻る箇所を的確に叩かれた途端、熱が爆ぜて小さく屁放してしまふ。さらに燻りを刺激され痛悦に腸全体が躍動し、直腸粘液すら漏らしてしまふ。

「~~~~くうほオ♥」

「ほら」

羞恥で耳まで赤くなる。

ムギユ！ しかし容赦ない髓は、真つ赤に腫れた尻肉を抓ってくる。

「ふっほお〜ッ」

ぶぢゆぶぢゆぢゆぶぶぶつぷつ!!

梁型があつという間に直腸汁でベトベトに汚れていく。

(こ、こんなつろで、ぎぼぢイいいなんで嫌だあ!)

「オマエはほんとうにお尻が弱いね」

ムギユ！ ぎゆム！ むつきゆううう。むぎゆ〜ううう。むぎゆぢい〜!!

ぶぢゆぶぢゆ……ぢゆぶぶつ……ぶぢゆぶぢゆ……ぢゆぶぶぶぶぶぶつ……。

「お、やつべ、やべつろオつ、く、つくうふつほはあああああつヒイイイイイ!!」

何度も何度も抓られ、稀に捏ねられる。しかも捏ねられるさいには、髓の爪から毒を注入され敏感な肌へつくりかえられていった。

「お♥ ンうう……くっほ、くっほおおお!!」

(こ、こんらあ、こんらの嫌だあ! こ、これじゃ、決別した頃から……なにもかわつてえ、

んつくほオオオオオおおお♥♥♥)

ピクピク♥ ピクピク♥ ピクピクッ♥

全裸に紐と棒で固定された青年戦はなすすべもなく抓られるたびに大尻が上へ下へと

踊り、むず痒さが消える爽快感を無視しようと顔を押しつけ、シートには涎の湖ができて
いる。

(ち、力はいらぬ……まだゆい……)

ぶつちゆ、ぶつちゆぢゆぶううるるるつ。

快樂で体の筋肉が緩みだし、梁型を啜っていた括約筋の絞めつける力も弱くなり梁型を
ゆつくりとヒリだしはじめてしまう。

「ダメ」

「ああ……」

髓の指が飛び出しかかっていた梁型の動きをとめ、ゆつくりと奥へ押し戻していく。

「コレ、お仕置き。ちゃんと百回数えてごめんさいししない限りダメ」

「お、俺は……なんにも、悪いことぢでないっ……!!」

頭上から溜息。

「ああ、フアム。ほんと悪い子。いつもこうなる。私もオマエに意地悪したくてしるわけ
じゃないのに——三本目のお薬追加」

ぐぢゆ……ぬぢゆぢゆぶぶぶぶつぶつちゆ! ぶつちゆぶるうううう!!

梁型が引き抜かれ、二本目よりも大きな容器の浣腸器がフアムの菊皺へ突き刺さる。そ
のまま一気にシリンダーが押され浣腸剤が雪崩れ込んでいく。

「お、おっこ、ぐつうぎい……アアアアアアア!!」

ボコ。ぶくぶく。ボコボコツン。ぶくぶくぶつく。

三本目の浣腸剤は、ただでさえ二本分の浣腸を蓄えている排泄器官のなかで膨らみ固形化しだした。激しい圧迫感と苦痛に涙さえ滲みませ獣じみた咆哮をあげる弟子へ、しかし師匠は容赦しない。

「栓も増やす」

両手で抱えないといけなほどの長い毛虫じみた梁型を浣腸器が抜けたファムの肛門孔へ押しつけ、そのままグッと奥へと押し込んだ。

ぬぢゅ……ぬいぶぶぶつぶぶうぢゅぢゅぶぶぢゅつぶぐぶぶぶううううぶ~~~~!!

「~~~~ツツツ、オ、オ、オ♥」

(こ、こおれえ……らめえ……！ 意識トんどまう……!!)

疑似毛虫デイルドにより固形化浣腸剤まで一気に腹奥へ押し込み、髄は先っぽが見えなくなるまでデイルドを押し込んでいく。下腹部がポコつと膨らみ意識がツーンと遠くへいきそうになってしまう。

ギョルルル……グギョルルるうう……。

腸鳴りと激痛だが拘束された体ではのたうち回ることも許されない。汗まみれになりながら呻くだけ。さらにそこへ、別々の形をした梁型が一気に四本も突っ込まれ肛門皺が左右へ伸び拡がってしまう。

ズボ!! ズボ!! ズボボ!! ズッポオオオ!!

「凄い。凄い。四本も挿ちやったね。昔よりいっぱいはいったようになつたねえ」

「ぎゅうぶ」

「でも、大人になったファムならあともう一本いけるネ？」

グボツ！ ゴリイイイ！！

無慈悲な五本目。ソレは丁度先端が尖っており腸壁越しにファムの前立腺を押し潰しにかかっていた。

「おーっ♥ ほーっ♥ おおおっ♥ ふうーっ♥ ほーっ♥」

「入った、入った。ファム、ほんとうに大きくなったねえ」

臀部に葉を塗されながら、拍手代わりに尻を軽く叩かれるが反応する余裕もない。むしろ叩かれるたびに五本目の梁型に前立腺を刺激され、短く呼吸をするので精一杯。

「じゃ、お仕置き再開」

（あ、ああっ、ヤバイ♥ この流れはヤバイっ）

パアシン！ パアシン！ パアシン！

腹痛と脂汗で灼熱に見舞われるが、反してとても冷たいものが背筋を伝うなかで、三度目の鞭叩き。先程よりもたっぷりと葉を塗られたが、皮膚が破けて出血しそうなほど痛い。そのくせ尻の表面を叩かれているだけなのに、奥底まで甘美な振動に揺さぶられ腹の奥がドロつと淫熱に溶かされる。

「お♥ あ♥ ほっ♥」

（ぐ、ぐるう！！ 叩かれながら、グリグリつてえ♥ ダメ……やめろ、耐えろオ……！）

「お仕置きで、おチンチン硬くしちゃうなんて……いやらしいダメな子」

「~~~~っ。ち、ちがつ、ちがうっ……あ、あああ……」

クスクスと耳元で囁かれ、ファムの頬どころか体中が恥辱に染まった。

「パアシン!! パアシン!! パアシン!!」

「ごりイっごぢゆう……ごぢゆううう……ごっぢゅんっ!

ファムの股間、花芯は立派に勃起し我慢汁をこれでもかと垂らしている状態。尻叩きによる振動でエネマガラが動き、抉るよう前立腺を被虐アクメで苛めてくる。

「ほら、ダメでいやらしいファムはいつもコレでイク。おとうさん先生、知ってるんだから」

「アアアア や、やべ やべっろ やべっでええええふっぎイイ——お♥ おおああ

「お♥ ふっほ♥ イ……いくう……!」

「パアヂイイイイン!! どびゆるう〜!」

今まで一番骨身に染み入る深い鈍痛悦に頭を真っ白にさせながらシートに嘔みつき喘ぐ。花芯から白濁を飛び散らしベッドシートを汚してしまった。

「ほら、やっぱりファムはダメな子」

「んっほおおおっ♥ ふっほおおお♥ あっひ、あっひイイイイイイ♥」

「イク♥ いっぢまうううう、ケツ叩かれるたびにいぐう♥♥♥」

「パアシン! どっびゅ。パアシン!! どっびゅっ。パアシイン!! どっびゅっ。

我慢できない。叩かれれば、マゾヒズムのままに射精してしまう。

いつもこうだった。いつもお仕置きで尻を叩かれ、我慢しようとしても最後には泣きじやくりながら射精してしまう。

英雄

は 寵愛シリーズ 4

闇のなか

2023年 9月9日 発行日

【著者 編集】 カルビ
【制作】 焼肉文庫
【発行元】 Mail karubidouzinn@gmail.com
Twitter NiKuZiRu2022
Pixiv 12050686

備忘録

- レイアウト -

【原稿サイズ】 新書サイズ
【行・文字数】 18行×40字
【行間・間隔】 固定値 13
【余白】 上 25mm/下 35mm/内 10mm/外 10mm
とじろ 3mm/ヘッダー 17mm/フッター 5mm

- フォント -

【タイトル】 装甲明朝
【本文】 S-OTF-清和堂明朝文芸 Std R
【ノンブル】 メイリオ

【注意】

本書は成人向けです。未成年の方の目に触れないようお願いいたします。

無断転載・複製・アップロードを硬く禁じます。

ネットオークション、フリマアプリでの販売はご遠慮ください。処分する際は同人専門店の中古書店に売却していただくか、中身がわからない状況にさせていただいた上で可燃ゴミとして廃棄してください。